

隋代詩の中の連綿語と小説語彙の同源現象に関する考察

A study on the Homologous Phenomenon between Reduplicated Words in Sui  
Dynasty Poetry and Novel Vocabulary

白曉帆

Bai Xiaofan

**要旨**：隋代は中国文学史上における重要な文学過渡期であり、その詩と小説は語彙運用において顕著な同源現象を示している。この現象は当時の社会的言語生活における相互関係を反映すると同時に、文学創作における言語資源の共有メカニズムをも明らかにしている。本稿では、音声・意味・文法機能の三つの側面から、この同源現象と原因を検討するものである。

**キーワード**：隋代文学、詩の連綿語、小説語彙、同源現象、文化的動因、言語革新

目次

はじめに

一、隋代の詩と小説の語彙概況

1.1. 隋代詩の語彙的特徴

1.2. 隋代小説の語彙的特徴

1.3. 詩と小説の語彙比較

二、隋代詩の連綿語と小説語彙の同源性分析

2.1. 同源語彙の音声対応関係

2.2. 同源語彙の意味変遷の軌跡

2.3. 同源語彙の文法機能の比較

### 三、同源現象の原因と影響

#### 3.1. 社会文化的要因

#### 3.2. 文学創作上のニーズ

#### 3.3. 後世文学への影響

終わりに

参考文献

### はじめに

隋代は中国史上、魏晋南北朝と唐宋をつなぐ重要な過渡期として位置づけられ、文学分野において独自の文化融合的特徴を呈している。この時期の詩歌創作と小説テキストは、南北朝時代の文化遺産を継承しつつ、言語形式の革新を通じて後世の文学発展の礎を築いた。言語学的視点から見ると、隋代文学作品中の語彙運用は、漢語語彙体系が古代漢語から中古漢語へと移行するダイナミックな過程を集中して体現しており、その語彙選択は前代文学の審美性を保ちつつ、唐宋文学における言語革新の萌芽をも内包している。特に、詩歌中の連綿語と小説中の俗語語彙が隋代テキストにおいて顕著な同源性を示しており、これは当時の社会言語生活と文学創作との間にある深層的な相互作用を映し出している。現時点での隋代文学研究は、主にその歴史的な位置づけや芸術的スタイル分析に集中しており、言語体系内部における語彙の変遷規則に関する探求はまだ不十分である。本稿では、語彙の同源現象を深く分析することにより、隋代文学が唐宋文学への転換期において果たした媒介的役割をより正確に把握し、中国文学発展系譜の構築を補完するとともに、漢語語彙史研究に新たな理論的視角を提供したい。

## 一、隋代の詩と小説の語彙概況

### 1.1. 隋代詩の語彙的特徴

隋代詩歌は南北朝詩と唐代詩の中間形態として、語彙体系において「前を継ぎ、後を啓く」という独特な特徴を示している。音韻の面から見ると、隋代詩人の声律に対する自覚意識はすでに明確に高まっており、これは永明体の詩学的伝統と密接に関係している。双

声・疊韻語の集中的な使用は、その音韻美を構成する重要な要素となっており、例えば虞世基『出塞』中の「凜凜（りんりん）辺風急、蕭蕭（しょうしょう）征馬煩」（『先秦漢魏晉南北朝詩・隋詩』より、遼欽立編、中華書局、1983年）に見られる「凜凜」と「蕭蕭」はいずれも双声かつ疊韻の連綿語であり、当時の四声調配原則に合致しながら、声調の循環的反復によって詩歌の音楽性を強化している。

意味の面からの考察によれば、隋代詩歌語彙は南朝宮体詩の華麗な用語伝統を引き継ぎつつ、新たな意味拡張の傾向を示している。一方では「清談」「嘯傲（しょうごう）」などの文人雅集場面で使われる語彙が依然として玄言詩の余韻を伝えているが、他方では「烽火」「羽書」といった新興の社会的現実語彙が詩歌語料庫に登場し始めた。注目すべきなのは、一部の連綿語が隋代において意味の活性化現象を示している点である。例えば「逍遙（しょうよう）」という語は、煬帝楊広の『夏日臨江詩』中の「夏潭蔭修竹、高岸坐長楓。日落滄江静、雲散遠山空。鷺飛林外白、蓮開水上紅。逍遙有餘興、悵望情不終」という文脈において、本来の「閑適自在」という意味が拡張され、自然に順応し、心の豁達さを保つ生活態度として詩的に表現されている。このような意味の移行は、後の唐詩におけるイメージ体系に重要な語彙資源を提供した。

語彙構造の面では、隋代詩歌は単字語が主導しつつ、複合語も併存する特徴を示している。基本語彙レベルでは、依然として単音節語が主流であり、「雲」「月」「劍」などの高頻度語は謝靈運の詩風の影響下で物象記号としての表意機能を維持している。同時に、複合語の使用頻度は著しく上昇しており、特に名詞性複合語の構詞法がすでに一定の規模を備え始めている。注目に値するのは、一部の双声連綿語が付加構詞法を通じて新たな語形を派生させている点であり、例えば「窈窕（ようちょう）」が「窈窕淑女」という定型的表現へと発展している。このような構詞パターンの規範化は、唐代詩歌の語彙体系の基礎を築いた。また、隋代詩人は外来語の現地化改造にも注目すべき成果を残しており、梵語音訳語である「刹那（せつな）」「菩提（ぼだい）」（楊広『謁方山靈巖寺詩』より）などが詩中に登場する際、意識または転訳によって意味の在地化が行われている。このような異言語間語彙現象は、中古漢語語彙の変遷を考察する上で貴重な資料となっている。

## 1.2. 隋代小説の語彙的特徴

隋代小説は文学的過渡期における重要な媒体として、語彙運用において鮮明な時代的特徴と文芸的特性を示している。六朝志怪小説の典故の堆積と文言の規範性に比べ、隋代小説は六朝文人の雅趣を継承しつつ、唐伝奇への転換を示唆する通俗化の傾向を顕著に打ち出している。その語彙体系は口語化と形象性の次元において画期的な突破を見せ、同時期の詩歌との語彙的相互作用を検討する上で重要な語料を提供している。

口語化の面では、隋代小説は日常会話の自然な再現を特に重視しており、『古鏡記』における人物の対話は短文構造や省略表現を多用し、「黄昏後」（魯迅編『唐宋伝奇集』、齊魯書社、1997年）といった当時に流行していた通俗的フレーズを通じて場面のリアリティを構築している。このような言語選択は伝統的文言の制約を打破し、物語に没入感を与えるものとなっている。

形象性の次元では、隋代小説は連綿語を集中して使用することで叙述の映像的効果を強化している。自然景観の描写において「氤氳（いんうん）」「霏微（ひび）」などの語彙が雲霧の描写に頻繁に用いられ、六朝駢文の修辞伝統を継承しつつ、双声・叠韻の音韻的特質によってテキストの音楽性を高めている。人物の容貌描写においても「婉孌（えんれん）」「夭桃（ようとう）」（江総『詠李詩』より）などの語彙が用いられ、文言語彙の典雅さを保ちながら、複合語の視覚的特徴を通じて具体的かつ感覚的なイメージを構築している。このような語彙選択考慮は、小説叙述が文学性を維持しつつ、より直感的な美的伝達効果を獲得することを可能にしている。

隋代小説語彙の文芸的特異性は、仏教用語の創造的転化にも見られる。仏教思想の世俗化に伴い、「輪廻」「因果」などの概念が通俗文学を通じて小説創作の文脈に取り入れられた。例えば『旌異記』中の「勅して此の経を写し伝ふ、今所謂『高王観世音』是なり。敬徳放還、齋を設けて願を報ず」（魯迅『古小説鉤沈』、齊魯書社、1997年）という記述は、宗教的概念を借用して物語の論理を構築しつつ、語彙の日常化翻訳を通じてそれを運命の主題を表現する通俗的媒体へと転化させている。このような語彙は詩歌中ではしばしば隠喩的形式で現れる。例えば江総『洛陽道』中の「小平路四達、長楸五鐘を聴く。玉節司隸を迎へ、錦車濯竜に帰る」という句に見られる「四達」「五鐘」のイメージは、仏教の因果観を暗示しつつ、小説語彙の隠喩的伝統を継承している。このようなジャンル横

断的な語彙の流動は、隋代文学言語体系の開放性を示すとともに、詩歌と小説の互文関係を考察するための具体的な材料を提供している。

### 1.3. 詩と小説の語彙比較

隋代の詩歌と小説は、文学ジャンルとしての言語運用において顕著な差異を示している。この差異は文体機能の違いに起因するだけでなく、社会文化的文脈の浸透とも深く関係している。詩の創作は文人階層が主導しており、その言語体系は南朝の綺靡（きび）な文風と北朝の素朴な伝統の双方の影響を受け、凝縮的かつ精練された審美的特徴を形成している。連綿語は詩の言語の重要な構成要素として、音韻の組み合わせと意境の醸成において鍵となる役割を果たしている。例えば双声語の「倜儻（てきとう）」や疊韻語の「踟躕（ちちゅう）」などは、声調の調和的配置を通じて詩歌の韻律的な美を強化すると同時に、特定のイメージ記号機能を担っている。これに対して、小説テキスト、特に志人小説の言語は白描的叙述に近い傾向があり、その語彙体系は文言伝統の一般的用語を含むと同時に、市井の俗語や民間口語を広く吸収し、通俗的で理解しやすい叙述スタイルを形成している。例えば『水飾』『古鏡記』などの隋代小説に頻出する「妓航（ぎこう）」「商賈（しょうこ）」などの日常用語は、詩歌言語とは異なる社会生活指向性を示している。

語彙機能の面では、詩の語彙は高度な象徴性と概括性を特徴としている。連綿語は詩の言語の典型例として、しばしば隠喩的文脈の構築に用いられる。例えば「蒼茫（そうぼう）」は広大な時空間を象徴し、「氤氳」は曖昧模糊とした意境を表す。その意味指向はしばしば文字通りの意味を超えて、多義的解釈の空間を形成する。一方、小説語彙は叙述機能の実現を重視し、具体的描写を通じて物語の場면을構築する。例えば隋代小説における人物の衣装「錦衣」「羅裙」の直接的描写や、自然景観「青山」「碧水」の素描的表現は、いずれも語彙運用の指示的特徴を体現している。この差異は本質的に、文学ジャンルが言語機能に対して異なる要求を持っていることを反映している。すなわち、詩は抒情表現の含蓄性を追求し、小説は叙述描写の明確性を重視するのである。

語彙の由来という観点から見ると、隋代詩歌語彙は漢魏樂府の伝統を継承しつつ、さらに南朝宮体詩の用語的特徴を吸収し、文人的な語彙体系を形成している。その中で連綿語の使用は『楚辞』『詩経』の修辞伝統を継承すると同時に、六朝以降の音韻学的成果を取

り入れており、例えば「透迤（いいい）」の声調配置は古詩の四声規則に合致するだけでなく、隋代に新たに台頭した格律的要求にも適合している。一方、小説語彙はより複雑な由来を示しており、文言古典の規範的用語を含むと同時に、民間言語の生き生きとした要素を広く取り入れている。例えば隋代小説に登場する「不敢住（泊まれない）」などの俗語は、市井文化が文人創作に浸透したことを直接反映しており、このような階層横断的な言語の融合は詩歌テキストにはあまり見られない。

二つのジャンルの語彙使用には交叉・浸透現象も存在する。詩において文学的意味を担う一部の連綿語が、小説の叙述において具体的文脈下での指示的表現に転化することがある。例えば「徘徊（はいかい）」という語は、詩では感情の停滞や思考の流れを象徴するのに対し、小説の情景描写では人物の物理的動作を指す場合がある。このような語彙意味の転換は、言語記号のシニフィアン（能記）の安定性を示すと同時に、文学的文脈が語彙機能を再定義する様子も示している。この現象は文学言語の変遷規則やジャンル横断的語彙運用を考察する上で重要な研究素材を提供し、隋代文学全体の言語生態を深く理解する基礎ともなっている。

このような語彙比較が明らかにする深層的文化的論理は、詩が雅文学の代表として言語の審美的精練と伝統的継承を重視するのに対し、小説は通俗文学の媒体として民間言語の変遷を記録する役割を担っているという点にある。このようなジャンル差異に起因する語彙の特徴の分岐は、隋代文学の場における雅俗文化の相互作用を反映すると同時に、文学創作における言語体系の階層的運用メカニズムをも映し出している。両者の語彙体系を深く比較することは、諸研究者が隋代文学言語の通時的変遷軌跡をより正確に把握し、漢語語彙史におけるジャンルの影響問題を解明するための重要な事例を提供するものである。

## 二、隋代詩の連綿語と小説語彙の同源性分析

### 2.1. 同源語彙の音声対応関係

隋代詩の連綿語と小説語彙は、音声体系において比較的明確な対応規則を示しており、その同源現象の音声的特徴は、声母（子音）、韻母（母音・韻尾）、声調（四声）の三つ

の次元から分析できる。声母の面では、両者の同源語彙は多くが双声関係（頭子音が同じか近い）による音声対応を示している。例えば「参差（さんし）」（cēn cī）の双声構造は、詩・小説のいずれにおいても事物の錯綜した様子を描写するために用いられており、その声母群は主に唇歯音や舌面音から成り立っている。このような発音方式の安定的な継承は、隋代漢語の声母体系が双声連綿語の中で固定化しつつあったことを反映している。

韻母の対応については、疊韻関係（末尾の韻が同じまたは類似）が顕著である。例えば「彷徨（ほうこう）」（páng huáng）は詩・小説の双方で陽部韻尾を共有しており、その疊韻の特徴は『切韻』（唐・李舟編、台北：芸文印書館、1972年）音系における「唐韻」と「陽韻」を通じて検証可能である。これは隋代の音声体系において、疊韻連綿語の構詞法がすでに安定した範型を形成していたことを示している。

声調の対応面では、平仄（ひょうそく）の調和が特に際立っている。「逶迤（いいい）」（wēi yí）という語は、詩歌において上声と平声の組み合わせとして用いられるが、小説中の同源語「逶迤」でも声調配置が完全に一致している。このような厳格な声調対応は、近体詩の格律要求に従うだけでなく、小説用語にも音韻的リズムに対する潜在的な規範が存在していたことを示している。

音韻体系の変遷という観点からは、隋代の同源語彙における音声対応は、南北音系の融合という過渡期的特徴を呈している。例えば「逍遙（しょうよう）」（xiāo yáo）は詩では多く平声として用いられるが、小説中の「逍遙」は南朝『四声譜』の清濁声調体系を取り入れており、陽平と陰平の交替使用が見られる。これは隋代の声調体系が南北音系を融合する過程で柔軟性を持っていたことを示唆している。

韻母の変遷の面では、「婆娑（ばさ）」（pó suō）という連綿語と小説語彙「婆娑」の「歌部」から「梭韻」への変化軌跡が、『切韻』音系において「梭韻」が「歌部」から派生した音転規則と完全に一致しており、隋代韻母体系が連綿語構詞において歴史的連続性を保っていたことが確認できる。このような音声変遷の同源性は、「徘徊（はいかい）」（pái huái）の「皆韻」と「灰韻」が小説テキスト中に交互に出現する「迭韻相承（てきいんそうしょう）」現象にも見られ、これは実際には隋代中古漢語の韻部統合という動的過程に対応している。

一方、隋代の詩と小説の同源語彙は、文芸ジャンルの違いによって音変の遅延性を示すことも多い。詩歌は雅文学の媒体として、「氤氳（いんうん）」（yīn yūn）のような連綿語を『切韻』音系の「文韻」規範に厳密に従って用いるのに対し、小説中の同源語「氤氳」は一部の方言的入声特徴を韻母に残している。このようなジャンル間の音声的差異は、書記語と口語が音韻規範において漸進的に統一されていった過程を反映している。声母の音変差異も同様に顕著であり、詩歌中の「倉促（そうそく）」（cāng cù）の「倉」は精組声母を保持しているが、小説中の同源語「倉促」ではすでに清声母が濁化する傾向が見られる。このような非同期的変化は、隋代の音声が異なる文体において段階的に規範化されていたことを示唆している。

通時的視点から見ると、隋代同源語彙の音声対応規則は、漢語語彙変遷研究にとって重要な証拠を提供している。連綿語と小説語彙が共有する双声・叠韻構詞法は、中古漢語語彙体系における音声構詞法の安定性を裏付けている。声母対応における歯音化傾向、韻母対応における「一等韻」の優位性、声調対応における平仄協調メカニズムが一体となって、隋代漢語音声変遷の微視的図景を描き出している。これらの音声対応規則は、隋代における言語接触において文学ジャンルが音韻規範に与えた影響メカニズムを明らかにするだけでなく、唐宋期における連綿語の規範化と小説語彙の変遷との相互作用関係を考察するための音韻学的基礎をも築いている。

## 2.2. 同源語彙の意味変遷の軌跡

隋代の詩の連綿語と小説語彙の同源関係は、複雑な意味変遷の軌跡を呈しており、その発展過程は言語体系内部の自己調整メカニズムを体現すると同時に、文学ジャンルが語彙機能を方向づけて形塑することをも反映している。語彙の源流から隋代に至る通時的変遷をたどると、その意味変遷は「基本義項の分化-文学的文脈による再構築-ジャンル特性による強化」という基本的経路をたどることがわかる。初期の同源語彙は多く先秦・両漢文獻に由来する基本義項を持っており、例えば「窈窕（ようちょう）」は本来、女子の容姿が美しいことを指していたが、魏晋期にはすでに意味の汎化傾向が見られ、人物の外見描写だけでなく自然景観の空間的形態を形容するのにも用いられるようになった。このよう

な意味拡張が、隋代の詩と小説が語彙を共有する土台を形成した。例えば江総『今日楽相楽』中の「鄭態逶迤舞、齐弦窈窕瑟」という句がその典型例である。

詩の文脈において、連綿語の意味変遷は顕著なイメージ化（意象化）の特徴を示す。

「参差」を例に挙げると、この語は本来「長短が揃わない」ことを意味し（『詩経・国風・関雎』参照）、南北朝期にはすでに「蹉跎（さてつ：歳月のむだ遣い）」という転義が発展していた。隋代の煬帝楊広『月夜観星詩』では、この語が「蹉跎人生」という心理的風景を描写するために用いられ、空間的延長の意味がさらに抽象化され、心理空間に対する詩的想像を担うようになった。このような変遷は、詩創作が語彙のイメージ機能を強化する必要性を反映しており、語の音韻美を維持しつつ意味の指示対象を再構成することで、連綿語を詩の意境を構築する記号的媒体へと昇華させている。注目すべきは、このような変遷が不可逆的であることである。詩中の新義項はしばしば原義を置き換えて主流用法となる。例えば「孤輪」は隋代の楊広『幸江都作詩』においてすでに「月」の本義を離れ、「落日」の情景を専ら指すようになっている。

一方、小説語彙の意味変遷は、具体化と日常化が並行して進行する特徴を示す。隋代小説は物語叙述を重視するため、語彙選択は場面の再現や筋の展開により焦点を当てる。例えば「洪涌（こうゆう）」という語は同時期の詩歌では生命力や深遠な感情の比喩としてよく用いられるが、小説『古鏡記』では「波濤洪涌」（王度『古鏡記』、魯迅編『唐宋伝奇集』、齊魯書社）という固定搭配となり、その意味の重心は力強い比喩義から具体的な物象描写へと移行している。このような差異は、異なるジャンルが語彙機能に対して異なる要求を持っていることを反映している。すなわち、詩は意味の開放性と多義性を追求するのに対し、小説は意味の明確性と場面適合性を重視するのである。

両ジャンルのテキストにおける同源語彙には、双方向的な意味再構築現象も存在する。例えば「依稀（いき）」は隋代の詩において「過去の出来事をぼんやりと思い出す」という深層的な心理的含意を与えられている（侯白『旌異記』、魯迅編『古小説鈎沈』、齊魯書社）。一方、小説『旌異記』ではこれを具体的な物語展開と結びつけ、「依稀如夢（まるで夢のようにぼんやりと）」という具象的用法へと発展させている。このような相互作用により、一部の語彙は「文学的意味共同体」を形成し、その変遷軌跡はジャンル特性に制

約されつつも、異なる文学形式の間で意味の補完メカニズムを生み出している。例えば「参差」（楊広『月夜観星詩』、遼欽立編『先秦漢魏晋南北朝詩・隋詩』、中華書局）は詩歌では音楽性を強調して音のリズムを形容するのに対し、小説では視覚描写を重視して建築物の形状や物品の配列を描写する。このような分化が最終的に、同源語彙が文学システム内で差別化された意味領域を形成することにつながっている。

隋代の文学的文脈において、同源語彙の意味変遷は本質的に文学言語記号システムの再編成プロセスである。詩はイメージの再構築を通じて語彙に美的付加価値を与えるのに対し、小説は叙文的文脈を通じて語彙の意味を具体化する。このような二重の変遷は、文学語彙の体系性を強化するとともに、中古漢語語彙が文学創作においてどのように動的に適応したかをも明らかにしている。この変遷軌跡を研究することは、隋代文学言語の特色を解明するだけでなく、漢語語彙発展史におけるジャンルの影響を考察する上での典型的事例を提供するものである。

### 2.3. 同源語彙の文法機能の比較

隋代の詩と小説における一部の同源語彙の文法機能の差異は、主に品詞活用、句法構造、意味負荷様式の三つの次元に現れている。

品詞の面では、詩中の連綿語はより単純な修飾語として存在する傾向が強く、その双声・叠韻的特徴は主に韻律効果を強化するために用いられる。例えば「翩翩（へんぺん）」という語は詩では青年男子の洒脱な風采を形容する形容詞として頻繁に用いられ、その文法機能は近体詩の格律規範に制約され、隣接語との平仄対仗関係を形成しなければならない。これに対し、同時期の小説中の同源語彙はより強い実詞的属性を示しており、「翩翩」は直接主述構造を形成することがある。例えば叙述テキスト中の「帆をあげて翩翩、直ちに南浦に入る」（王度『古鏡記』、魯迅編『唐宋傳奇集』、齊魯書社）という文では、描写機能を果たすと同時に物語の展開にも寄与している。

句法構造の面では、詩の連綿語は特定の文法的枠組みに依存することが多く、その位置は文の対称性に制約される。典型的な例として「逍遙」があり、律詩ではしばしば句頭に置かれ音韻的導入部を形成する。例えば「逍遙有餘興、悵望情不終」という句構造では、その文法機能は固定的である。これに対して小説中の同源語彙は複雑な複文の中に柔軟に

埋め込まれ、副詞的に動作過程を修飾することもあれば、独立した分節を構成することもある。例えば「逍遙終日（一日中逍遙として過ごす）」は、単独で状態を表すこともできれば、後続の動作と連続した物語的連鎖を形成することも可能であり、文法的分布範囲が著しく拡大している。

意味担当の面では、詩の連綿語は隠喩的転義を通じて多義的ネットワークを形成し、その本来の意味は芸術的加工を経て象徴的記号へと転化されることが多い。例えば「婆娑」は詩では本来の「旋回しながら舞うさま」という意味を離れ、「木の葉が茂って揺れるさま」や「涙がぼろぼろと落ちるさま」といった新たな意味を獲得する。一方、小説テキストでは語彙の指示機能がより重視され、「婆娑」は多くの場合、具象的描写属性を維持している。例えば『古鏡記』中の「その後、真を求めて廬山に至り、数ヶ月婆娑し、あるいは長林に栖息し、あるいは草莽に露宿す」という記述では、直接的に物語上の時間要素を構築している。このような差異は、二つのジャンルが言語の経済性に対して異なる要求を持っていることを反映している。すなわち、詩歌は少ない語で多くの意味を表現すること（以少総多）を追求し、語彙の多機能性を通じて意味密度を最大化しようとするのに対し、小説は物語の一貫性を維持するため、語彙機能を情報伝達の明確性に重点を置くのである。

一部の同源語彙は、二つのジャンルにおいて文法的転換が収斂する傾向も示している。小説中に抒情的な段落が現れる際、連綿語は一時的に詩的な修辞機能に戻ることがあり、逆に詩の創作中の叙述的断片では小説語彙の文法的特徴が取り入れられることがある。このような双方向的浸透現象は、隋代文学言語システム内部に動的均衡メカニズムが存在していたことを示しており、ジャンル規範と語彙機能の間に、分離しつつも融合する複雑な関係が形成されていた。文法機能の差異は本質的に、文学ジャンルが言語機能に対して方向づけられた選択を行ったことに起因するが、語彙が異なる文脈において適応的に調整されたことは、漢語表現システムの弾力的特徴と歴史的変遷規則を裏付けている。

### 三、同源現象の原因と影響

### 3.1. 社会文化的要因

隋代の社会文化的背景の特殊性が、詩の連綿語と小説語彙の同源現象に多面的な生成条件を提供している。まず、第一に南北文化の融合が語彙同源の重要な基盤となっている。隋朝は長期にわたる分裂状態を終結させ、南北の文人階層の流動が加速したことで、文学言語の相互作用が促進された。北方の文人が南方に下る際に持ち込んだ雅言（標準語的語彙）と、南方文士の通俗的表現が創作の中で相互に浸透し、連綿語はその音韻美と表意の凝縮性ゆえに、地域を越えた文学表現の共通媒体となった。例えば『古鏡記』に登場する「悠遠」という語は、南北朝の詩文創作に見られると同時に、隋代楽府詩にも頻繁に現れており、語彙が南北の文学場において双方向的に流動していたことを裏付けている。

第二に、文学ジャンル間の浸透メカニズムが語彙共有を強化している。隋代小説は叙述技法において詩の意境醸成を借用し、一方で詩歌創作も小説の叙述的言語的特徴を取り入れた。このようなテキスト間の相互参照（インターテクスチュアリティ）が、連綿語がジャンルの境界を越えることを促した。例えば「婆娑」は本来、自然景観を描写する詩の語彙であったが、『古鏡記』では逡巡・ためらう場面を描写する際に用いられ、本来のイメージを保ちつつ意味領域を拡張している。

第三に、宗教の伝播と世俗文化の融合が生んだ言語的緊張も無視できない。仏教経変文学（仏典の物語化）に含まれる連綿語が講唱形式を通じて民間言語システムに入り込み、小説創作はまさに俗語を吸収する先駆的媒体となった。一方、詩はそれらを雅化・改造することで語彙の再創造を実現した。

第四に、社会的流動性の高まりによる言語接触が、語彙同源をさらに推進した。隋代に科挙制度の萌芽が見られ、文人階層と市井文化の交わりが頻繁になった結果、市井の俚言（りげん）が文人の手によって精錬され連綿語へと転化され、逆に文人用語も小説創作の中で口語的に再構成された。

最後に、言語規範と変異の動的均衡が、語彙同源に制度的土壌を提供した。隋代に公式に推進された『切韻』規範は音声標準の統一を試みたが、民間言語の革新活力を抑えることはできなかった。このような規範と変異の緊張関係が、連綿語が異なるジャンルにおいて継承されつつも変容する特徴を生み出した。

まとめると、隋代の社会文化的場における南北交流、ジャンル浸透、宗教の世俗化、階層流動、言語規範メカニズムが複合的に作用し、語彙同源現象の生成システムを構成しており、これらの要因が総合的に作用することで、詩歌と小説は語彙選択において特有の同源的特徴を形成したのである。

### 3.2. 文学創作上のニーズ

隋代の文学創作が言語資源をジャンル横断的に活用したことは、詩の連綿語と小説語彙の同源現象に深い影響を与えた。文学ジャンルの進化的ニーズが作家にジャンルの境界を越えることを促し、語彙選択において開放的な特徴を示させたのである。詩の創作が言語の凝縮性と音楽性を要求したため、詩人は積極的に小説の叙述言語から生き生きとした語彙要素を吸収した。例えば隋代詩に高頻度で登場する「彷徨」「婆娑」などの双声・叠韻語は、近体詩の声律規範に合致するだけでなく、六朝小説における人物描写の伝統も継承している。このようなジャンル横断的な語彙の流動は偶然ではなく、文学形式の革新と内容深化が共同で作用した結果である。

作家集団の創作実践が直接的に語彙共有メカニズムを形成した。隋代の文人は多くが「詩文兼擅（詩と散文の両方に通じている）」という創作の特徴を持っており、その文学創作はしばしばジャンル融合の傾向を示した。盧思道や楊素といった代表的作家は、詩歌創作に小説でよく使われる「徘徊」「慷慨」などの語を組み込み、詩のイメージの層を豊かにすると同時に、小説叙述における心理・感情描写を継承した。このような創作習慣が、語彙を異なるテキスト媒体の間で自然に流動させ、双方向的影響の好循環を生み出した。作家が言語表現力を追求したことが、ジャンルの壁を打ち破り、詩歌と小説の間に語彙共有の潜在的ネットワークを構築させたのである。

審美的志向の収斂性が、語彙同源に内的動機を提供した。隋代文壇で盛んだった「文筆之弁（ぶんぴつしべん）」（詩文と散文の区別論）は詩文の差異を強調していたが、言語の形象性・音楽性に対する共通の追求が、詩歌と小説の語彙選択に審美的共鳴をもたらした。小説で場面描写に用いられる「激灑（れんえん）」「潺湲（せんえん）」などの擬音語は、詩において芸術的に精練されることで、元来の音韻的特徴を保ちつつ新たな詩的内

包を獲得した。このような審美面での共通性が、語彙が異なるジャンル間で移行することに天然の合理性を与え、言語資源のメディア横断的再生メカニズムを形成した。

社会文化的文脈が語彙流動に外的動力を与えた。隋代における科挙制度の確立と市民文化の興隆が、文学創作を通俗化・多様化へと押し進めた。詩歌創作が小説の「嘸羅（ろうら）」などの市井用語を取り入れたのは、雅俗共賞の伝播ニーズを満たすとともに、詩の表現次元を拡張するためであった。一方、小説が詩の「皎皎（こうこう）」「翩翩」などの文雅な語彙を借用したのは、叙述言語の格調を高めるためであった。このような双方向的語彙浸透は、本質的には文学が社会文化的変革に適応するための言語戦略であり、詩歌と小説がジャンルの特徴を維持しつつ、独特な語彙共生関係を形成することを可能にした。

語彙同源現象の深層的原因は、本質的に隋代文学創作がジャンル革新、作家実践、審美追求、社会的ニーズの共同作用の下で行った言語選択の結果である。このようなジャンル横断的な語彙共有は、文学言語の表現システムを豊かにしただけでなく、隋代文学が六朝から盛唐へと移行する時期に特有の文化統合的特徴をも映し出し、中古文学発展を理解する上で重要な観察視角を提供している。

### 3.3. 後世文学への影響

隋代の詩と小説における語彙レベルでの同源現象は、特定の歴史段階における文学様式の融合的特徴を反映するだけでなく、後世文学の語彙発展に深い影響を与えた。この語彙システムの双方向的浸透と創造的転化は、文学言語の豊かさと表現力を高めると同時に、後世文学に独自の審美的範型と創作パスをもたらした。

語彙の面では、隋代詩歌の連綿語はその音韻の流麗さとイメージの凝縮性ゆえに、後世文学に模倣可能な言語範型を提供した。詩に由来する多くの連綿語が小説テキストにおいて再解釈され、叙述機能を付与された。例えば「荏苒（じんぜん）」（楊素『贈薛播州』其七、逸欽立編『先秦漢魏晉南北朝詩・隋詩』、中華書局）や「寂寂（じゃくじゃく）」（楊素『山齋独坐贈薛内史』其二、同上）といった語彙は、隋代小説において本来の音韻美を保ちつつ、具体的な物語展開に組み込まれることで叙述的張力（ナラティブ・テンション）を獲得した。このような転化過程により、文学言語はジャンルの境界を越え、異な

るテキストタイプの中で多次元的な意味派生を形成し、後世の文学創作に豊かな語彙貯蔵庫を提供した。また、小説の通俗的語彙が詩的に用いられる現象も重要である。市井用語が詩歌によって精練され、雅俗融合の言語が形成され、宋代話本や元曲において継承・発展し、最終的に文学言語の大衆化への転換を促進した。

ジャンル相互作用の面では、隋代文学における語彙共有メカニズムが、後世の文学ジャンルのクロスオーバー融合に模範を提供した。詩歌と小説が語彙システムにおいて浸透しあう中で形成された「互文性（インターテクスチュアリティ）」的特徴は、唐宋期の文人が異なるジャンルの言語的特質を自覚的に統合する契機となった。白居易の『長恨歌』における叙述の詩句と抒情的語彙の有機的統一は、隋代詩学と小説叙述戦略の融合の痕跡を示している。このようなジャンル横断的实践は、ジャンルの表現境界を広げるだけでなく、後世の作家が語彙選択において既存のジャンル規範を突破し、より包括的な言語表現体系を形成することを可能にした。例えば宋代文人の創作した「詩話」類のテキストは、隋代の文学語彙共有の伝統を継承し、詩学批評と小説的筆法を結合させて、新しい文学ジャンルを創造した。

創作技法の観点から見ると、隋代文学における同源語彙の運用は、後世文学に特有の修辞伝統をも育んだ。詩の中の連綿語の音律美と小説語彙の叙述機能が結合し、「詩的叙述（ポエティック・ナラティブ）」という独特な手法が形成された。この手法は唐代辺塞詩において戦争場面のイメージ化描写として現れ、明清小説では詩詞を叙述に組み込む典型構造へと発展した。例えば『紅樓夢』に大量に挿入された詩詞と日常会話の交錯は、本質的に隋代以来の文学語彙の双方向的流動伝統の継承と昇華である。語彙システムの交叉的浸透を通じて、異なるジャンルの美的特質が相互に吸収され、最終的に中国文学に特有の「詩文一体」観念が形成された。

隋代文学の同源現象が後世に与えた影響は、語彙活用とテキスト再構築の二つの面で顕著に現れている。一方では、詩と小説が共有する語彙が、時代を経るごとに作家たちによって再創造され、多義性と開放性を備えた特徴を発展させた。例えば「徘徊」は『贈薛播州詩』其十における抒情的イメージから、唐伝奇における場面描写を経て、最終的に明清小説において人物の心理描写に頻用される語彙となり、その意味変遷の軌跡は文学語彙の

通時的発展の内在的論理を明確に示している。他方では、隋代文学における語彙のジャンル横断的運用が、後世のテキスト再構築に方法的示唆を提供した。宋代文人が隋代詩文語彙を系統的に整理して類書を編纂したり、明代の擬話本が隋唐詩歌語彙を創造的に流用したりしたのは、いずれも早期の文学語彙共有モデルの継承と発展を体現している。このような時代を越えた語彙継承メカニズムが、中国文学言語の綿々たる継続を保障している。

総括すれば、隋代の詩と小説の語彙同源現象は、語彙システムの双方向的相互作用、ジャンル境界の浸透的突破、修辞手法の創造的転化を通じて、後世文学の言語発展に多層的な示唆と参考を提供した。その影響は具体的な語彙の伝承・変遷にとどまらず、より深遠には、中国文学が言語革新を重視し、雅俗共賞を追求するという審美的伝統を形成することに寄与した。このようなジャンルを越えた語彙共有モデルは、現代文学創作においてもなお、その内的な進化論理と審美的価値を継続している。

## 終わりに

本稿は、隋代の詩と小説における連綿語を体系的に比較・語料分析することにより、二種のテキストが語彙システムにおいて顕著な同源現象を示しており、その背後にある深層的文化的動因を明らかにした。

まず、語彙の類型において、隋代の詩と小説が共有する連綿語は主に自然景観・人物描写・感情表現の三大カテゴリーに集中している。この語彙同源現象は、隋代文学言語の革新と内在的な関連を有している。南朝宮体詩が連綿語を密集的に堆積させる傾向があったのに対し、隋代作家は詩歌において語彙のイメージ構築機能をより重視した。例えば盧思道『従軍行』中の「長風蕭蕭水を渡り来たる、帰雁連々天に没す」という句における「蕭蕭」の反復使用は、樂府の伝統を継承しつつ、小説叙述中の「蕭瑟（しょうそつ）」と意味的に呼応しており、文学言語が形式主義からイメージ重視へと転換する軌跡を体現している。一方、小説テキストは詩歌連綿語の韻律的特徴を吸収し、「恍恍（こうこう）」（王度『古鏡記』、魯迅編『唐宋伝奇集』、齊魯書社）など、文学性と叙述機能を併せ持

つ新しい表現を形成した。このようなジャンル横断的言語実験が、唐代伝奇の成熟の基礎を築いた。

本稿は、隋代文学における語彙同源現象が単なる言語素材の借用にとどまらず、文学ジャンルの相互作用、文化統合、言語革新の総合的表れであることを実証した。この現象は文学史的次元において、従来の「過渡期」という曖昧な認識を打破し、隋代文学の独自の貢献を再評価するための実証的根拠を示しておく。また、語彙の通時的変遷の複雑な経路を明らかにし、漢語語彙史研究に重要な時期の動的サンプルを補充した。その方法論的価値は、ジャンル横断的語彙比較の分析枠組みを構築し、今後の文学ジャンル研究における語料庫の構築に操作可能なパラダイムを提供した点にある。

#### 参考文献

- (1) (唐) 李舟『切韻』、台北：芸文印書館、1972年。
- (2) 邵栄芬『切韻研究』、北京：中国社会科学出版社、1982年。
- (3) 遼欽立編『先秦漢魏晉南北朝詩』、中華書局、1983年。
- (4) 魯迅校訂『古小説鈎沈』、齊魯書社、1997年。
- (5) 魯迅校訂『唐宋伝奇集』、齊魯書社、1997年。
- (6) 蕭滌非・蕭海川補遺『漢魏六朝樂府文学史』、人民文学出版社、2011年。
- (7) 李建国箋积『唐前志怪小説集积』（改訂版）、上海古籍出版社、2011年。
- (8) 内山知也『隋唐小説研究』、東京：木耳社、1977年。
- (9) 松浦崇編『隋詩索引』、福岡大学中国文学学会、1993年。
- (10) 白曉帆『社会転換期における隋代文学研究』、東亜出版、2025年。